

読切小説

暗れ惑う虹彩

はじめて自分から好きになった人を追いかけて、富士山の見える町を離れた日奈。海を近くに感じながら、情熱がゆっくりと削りとられていく――。

窪美澄

ベランダに出て二人分の洗濯物を取り込んだ。この土地特有の風に一日中さらされ、からからに乾いたタオルや下着をリビングの床に放ると、ページユのカーペットの上に瞬く間に山になっていく。振り返ると、アパートの前には住人のための駐車場があり、その前には高い建物もないので、二階建てのこのベランダからでも夕暮れの空の下には山の連なりが見えた。ここから小一時間、東へ車を走らせれば海に出るが、この場所には海の気配がない。風がひどく強く吹いた日だけ、かすかに潮の香りが混じっているような気がするが、それでも、このアパートに引越してきてから、海という存在を間近に感じたことはなかったし、そこに近づいたこともなかった。

生まれ育った町で勤めていた老人介護施設からは、すぐそばに書き割りのような富士山が見えた。それは、いつもそこにあった。私が生まれ育った家からは見えなかったが、富士山がどの方向にあるのか、私は常に意識して暮らしていたような気がする。富士山はいわば、私にとって磁石のN極のようなもので、自分が今どこにいるのかを確かめるときには、富士山がどちらの方向にあるのかをゆつくりと考えてみればよかった。

あの町を出て気づけば二年半が経っていた。

私はこの町に来て、宮澤さんのアパートに転がり込み、まず車の免許を取った。両親が交通事故で亡くなっているから、車の免許を取ることは抵抗があったが、この町では車がないと生活も仕事もできない。以前と同じように老人介護施設で仕事をしなかったけれど、それはかなわなかった。この町には自分が思っている以上に介護士がたくさんいて、それなのに介護施設は少なく、介護の必要な老人の多くは、自宅で介護サービスを受けていた。職探しの日々を経て、訪問介護を行う会

社になんとか雇ってもらえることになり、私の仕事は昼間だけになった。コピー機器を取り扱う会社で営業の仕事をしている宮澤さんと生活リズムが合うようになったのは、暮らし始めた二人にとってはよいことだったのかもしれない。けれど、実際のところ、営業の仕事をしている宮澤さんは残業や接待で仕事の帰りが遅く、私が布団に入り、日付が変わってから帰宅することも多かった。私は寝るまでの長い時間を大学の編入試験の勉強のためにあてていた。

一人で過ごす夜に思い出すのは、富士山でも、あの町で共に暮らしていた海斗でもなく、自分が育ったあの家のことだった。おじいちゃんと暮らした家。古くて、ぼろくて、近所の子どもたちから妖怪ハウスと呼ばれていたあの家。家よりも広い庭、赤く錆びた門扉。まるで短期の旅行に出かけるように、鍵だけをかけて飛び出してしまったあの家。家具も、洋服のほとんどもあの家に置いたままだ。おじいちゃんの位牌だけは、自分のそばに置いておきたくて、私はそれをやわらかい新品のタオルに包み、トランクの隅に入れ、この部屋に持ってきた。それが良かったことなのかどうかわからない。この部屋に引越したとき、私はまずそれを取り出し、部屋に運び込まれたスツールの上に置いたのだった。

日が長くなったとはいえ、夕暮れはあつという間に終わってしまう。太陽が沈むと、空は黒く染まり、この土地特有の鋭い冷気が足下から這い上がってくる。ぼんやりと空を見ていた私は、自分の吐く息が白いことに気がついて、慌てて部屋の中に入る。仕事柄、風邪をひくことはできないし、誰かにうつすこともできない。掃き出し窓を閉めると、灯りに照らされた部屋の中と自分が映っている。私は窓ガラスに近づき、はあつと一度、大きく息を吐く。曇ったガラスに指で触れ、何かを